



20年目のきょうも、人と地球にやさしいアクション!

共生の時代

'09
2月

●発行:グリーンコープ共同団体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



講師 **アグネス・チャン**さん

香港生まれ。
1972年日本で歌手デビュー。上智大学国際学部を経て、カナダトロント大学(社会児童心理学科)を卒業
1989年 米国スタンフォード大学教育学部博士課程に留学。教育学博士号取得。エッセイスト、大学教授、日本ユニセフ協会大使として、芸能活動以外でも幅広く活躍中

「人と地球にやさしいアクション」をキーワードに、グリーンコープ20周年キャンペーンが展開されています。その一環として、グリーンコープ生協おおいた主催の講演会が2008年11月24日別府市で開かれました。講師は、ボランティア活動など、多方面で活躍中のアグネス・チャンさん。濃霧と強風にもかかわらず集まった組合員、一般参加者に加えAPUの学生たちで会場は満席となり、国際色豊かな活気あふれる講演会でした。講演の要旨を紹介します。

グリーンコープ生協おおいた
20周年記念講演会
立命館アジア太平洋大学(APU)
ミレニアムホール
約600人参加

みんな地球に 生きるひと

私が生まれた香港はイギリスの植民地でした。だから、私は生まれながらにイギリス人。鏡を見ては悩み「私はナニジンのの？」と聞いては母を困らせた。子どもの頃は目立たない子で、いつも姉たちと比べられる自分が嫌いでした。そんな私が変わったのはボランティアをはじめた中学生の頃。ギター片手に歌を歌って寄付を集めていました。それがきっかけで歌手になり、日本にきました。言葉もできない異国で不安がいっぱいでしたが、日本のみなさんは優しく受け入れてくれました。

歌は心をつなぐ

いろんなことがあつて手を辞めようかと悩んだ時期がありました。

期がありました。ちょうどその頃、初めて母の故郷を訪れることができました。歴史の間で香港とマカオが植民地となり、内戦を経て中国と台湾に分かれました。長い間政治的に門を閉ざされてきたばかり。それまで、聴いても歌ってもしないはずの私の歌、村中の子どもたちが歌って歓迎してくれました。お年よりたちが聴きながら泣きじゃくり、私もびっくりして大泣きです。その時「歌はすごいな」って思いました。人が行き来できない時代でも、歌は心をつないでくれていたんだなって。自分のことが嫌いだつたし、生まれた立場も微妙…。でも、だからこそいろんなところで歌えてきたのかも知れない。せっかくなので歌手にもなりたいから、軽々しく歌を辞めるなんて言っちゃいけないなあと思いました。

戦争はなぜ起るのだろう

冷戦が終わってもまだ、世界中で50カ国近くが戦争

をしています。8割が内戦です。宗教の違い、民族の違い、理由はいろいろ。でも、戦争が繰り返される場所のことを調べてみると共通点がありました。大半が、天然資源が豊かな地域なのです。石油とかダイヤモンドとか金とか宝を持っています。本場の内戦じゃなく、いわゆる代理戦争なんです。犠牲者の9割は民間人。ルールもない戦いによって、無抵抗の人たちまでも殺されます。たくさん殺るからと、そういう戦争の仕方になってしまいました。私はそんな国をいくつも歩いてきました。

1998年、日本ユニセフ協会の大使になってからは日々勉強です。知らなかつたことがいっぱいでした。タイの児童買春問題、50年以上内戦が続くスーダンでは児童兵士問題。貧富の差、エイズ、地震や災害のあと、苦しむたくさんの子



イラクで何が起っているの?

子どもたちに出会いました。一番つらかったのは、戦火の中の子どもたちです。特にイラクでの体験は衝撃的でした。

計器の針が振り切れる程の放射能。街中には戦車や武器が放置され、不発弾や地雷が埋まっていた。お腹を空かせた子どもたちは、食べものと交換するために車の部品や爆弾を分解します。それはとても危険なことで、それによつてたくさんの子どもたちが死にます。街の真ん中には見渡すほどの子どもたちの影が広がっています。行く先々で人々が泣いて訴えています。薬がない、水が出ない、電気も来ない病院で、懸命に行われる麻酔なしの手術。わめき声、血のおい、とても見ていられます。がん病棟に行くと、劣化ウラン弾の後遺症による末期がんの子どもたちで溢れんばかりです。3歳くらいの子が泣きつづいては、そのまま、痛み止めもありません。泣き崩れる母親や医師が私に言います。「ねえ、あなた日本から来たん

天国と地獄は、実は同じだそうなんです。丸いテーブルの真ん中にはごちそうがたくさん。人々は長い箸を持ってそれを食べようとしています。地獄では、箸が長く自分の口に運べない。欲求不満、イライラ、けんかが絶えません。一方、天国では、長い箸で目の前の人の口に食べものを運び、その人も目の前の人へ。お互いおいしいものを食べて幸せで和気藹々。私たちが住むこの地球は、天国と地獄どちらに近いのでしょうか?少しでも天国に近づけばいいな、次の世代のためにも。心構え一つで変えられることはあるのです。

Contents

グリーンコープを創った人たち(11) 元グリーンコープ連合 組織委員長 市吉 七海	
「女性」「平和」「福祉」の深淵を探る	2
ストップ再処理 あらためて問う! 六ヶ所再処理工場の問題	3
特集 グリーンコープの地域福祉の20年 あたたかく、やわらかい手を地域に広げる	4・5
国産原料を守るために… ジュース用(加工用)トマトの生産を応援しよう	6
2008年度 第2回酪農生産者交流会 すばらしいびん牛乳をこれからも グリーンコープがめざす生活協同組合①	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ 未来へつなぐ20年 私の思い	8

20年の歴史を創った原点に戻る



元グリーンコープ連合組織委員長
市吉 七海

グリーンコープ設立以前の各地域生協はそれぞれの地域が抱える課題や対峙していた社会問題に精力的に取り組んでいた。そして、1988年グリーンコープとして大同団結。同時に各地域の運動課題はグリーンコープ連合組織委員会に一旦は集約された。組織委員長となった古野悦子は直に福岡県の代理人一号へ。代わって市吉七海が組織委員長を引き受け課題の整理をしていく。グリーンコープの理念である「四つの共生」(自然と人・南と北・女と男・人と人)を貫く運動としてまとめあげるという至難の業を市吉はやり抜いたのだ。グリーンコープの運動は、一つひとつ実態を伴っていた。そして、「今」がある。



「女性」「平和」「福祉」の深淵を探る

旧家の古い因習と自分らしく闘う

あの戦争で父親を失った市吉は、母の苦勞を見て育つ。ことあるごとに「あんたが男だったら」と言われ、「女だつて自立して一人で食べていけるようにならなければ」と、看護師の資格を取り、前衛的に生きていこうと覚悟していた。しかし、それを生かすことなく結婚。しかも、嫁ぎ先は伝統ある旧家。もちろん同居以外の選択肢はなかった。

好奇心と意欲で開けていく世界があった

子どもたちが学校に行くようになると、PTAという、今までとは違う世界と出会う。そこでは多くの仲間もでき、一緒にPTAの改革にも取り組んだ。「反

戦と平和」「女性問題」「メラミン食器の問題」などを追求していったのもこの頃だった。



1993年「シャボン玉フォーラムin鹿児島」の分科会で実技を披露する市吉

「せっけん」が欲しいから生協運動にかかわる

「平和」は父親の戦死を受け止めた時から自分の永遠の課題、生きている限り希求するつもりだ。そして、「女性問題」は嫁いだ先から痛い程学んだ。学ぶことによって、さらに事の本質に迫る。その繰り返しだった。しかし、今なお女性の経済的自立は未達だと受け止めている。学校給食の「メラミン食器問題」では、安全性はもちろんだが、食文化を守りたいというのが市吉の第一目的だった。が、当時のマスコミは安全性のみを書き立てていた。それでもよかった。子どもたちのために守り抜いたのだから。

PTA活動と同時に地域生協づくりにかかわった。嫁ぎ先は兼業農家。米や野菜、果物まで栽培し、家畜も飼っていた。自給自足の生活、今でいうスローライフを送っていたと言え。しかし、どうしても手に人ならないものが。せっけんは無農薬レモンだ。それが欲しくて、地域生協設立の発起人のひとりに名前を連ねた。1978年いづか生協誕生と同時に、軽い気持ちで理事に。PTA活動延長線上程度のかかわりのつもりだった。

女性問題と福祉は表裏の関係

古く伝統の残る土地柄の中で生活するようになり、女性問題について猛烈に勉強した。高じて、1983年に福岡県の「女性研修の翼」に参加。デンマークや西ドイツ、イギリス、フランスなどを視察して、日本とは違う女性の生き方と先進的な福祉のあり方を目の当たりにする。日本の高齢化社会の到来がそこまで来ていることをひしひしと実感し認識もした。同じ頃、地域活動の一環として女性問題研究会を主宰し、希望者を募って連続講座にも取り組んだ。働く女性らを支援したいと心から思っていたことだった。

グリーンコープを越えて地域の中で生きる

市吉の溢れんばかりの信念はこれまで一度として潰えたことはない。グリーンコープ運動への思いも同じ、かわる程にその思いは強くなり、自分の中に育んできた。設立直後の混沌とした中、地域で豊かに展開されていた取り組みをグリーンコー

プ運動として整理する役割を組織委員会が担った。市吉は委員長として、「せっけん」「平和」「アジアとの連帯」という大きな柱にまとめたのだった。またその間、中期計画基本構想「夢ヲかたちに」の起草(4人のメンバーの1人)や組合員活動政策集や地域福祉の提起、「全組合員福祉アンケート」の実施、「福祉活動組合員基金」の提案・検討などに、精力的にかかわった。こうして連合組織委員長を4年間務めあげ、その後1年間連合理事会室(組合員事務局)で組合員活動を支えた。そして、1996年念願の福祉ワーカーズを立ち上げ、その代表になる。グリーンコープの福祉の取り組みがカタチになり、丁度、介護保険制度が社会に登場しようとしていた頃のことだ。その後、地域福祉に取り組みワーカーズを支えるために、2001年に設立した福祉ワーカーズ連合会の初代理事長に就任。ワーカーズの時代到来の一翼を担った。

現在、市吉はグリーンコープの活動の第一線を退いたものの、福岡県の男女共同参画審議会委員や地域のグループホームや小規模多機能施設の調査員などの活動に余念がない。日本では統計的に、女性の方が長生きをする。一人残される女性が余生をどう生きるのか。いずれ誰もが突き当たる問題でもある。1人で生きるのではなく、みんなと生きたい。市吉の、「平和」と「女性の経済的自立」、「福祉」のよりよき世界を探る道は今も続く。



11月30日上野水上音楽堂で、STOP再処理工場LOVE六ヶ所村「秋の大収穫祭」が開かれました。トークショーやライブに会場は盛り上がりました。「集まろう！伝えよう！」という歌声に、手拍子になり明るい希望の持てる集会になりました



グリーンコープ共同体を代表して挨拶をするグリーンコープ生協くまもと久米田理事長（左から3番目）

原子力発電は、核分裂反応によるエネルギーで湯を沸かし、その湯気でタービンを回し、それで発電機を回し電気を起こす仕組みだ。燃料のウランを燃やせば核分裂を起こし、核分裂生成物という死の灰ができる。1986年に起きた旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故は、炉心に広

ストップ再処理 あらためて問う！ 六ヶ所再処理工場の問題

11月29日、「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク（以下、阻止ネット）1周年「ストップ再処理市民集会」を東京ドイツ文化会館で開催、220人（内グリーンコープからは18人）が集まりました。
はじめに京都大学原子炉実験所の小出裕章さんと原子力資料情報室の澤井正子さんの基調講演。次いで、岩手県の重茂漁協などから、日々の活動のようすが報告されました。また、阻止ネット呼びかけ人団体からそれぞれ活動の報告やアピールがありました。
グリーンコープからはグリーンコープ生協くまもと理事長久米田薫さんが「グリーンコープは、生命を脅かすものには断固として『NO！』と断言してきました。これからも、この問題に積極的に取り組んでいきます」と元気に挨拶しました。
最後に、六ヶ所再処理工場の危険性を再認識し、稼働中止の運動をさらにすすめることを全員の拍手で確認しました。
小出裕章さんと澤井正子さんの講演要旨を紹介します。

人類には、放射能を無毒化する技術がない

放射線被曝とは

生命体への放射線被曝の歴史は、レントゲンが偶然放射線を発見してからだ。被曝の問題も含めX線とは何か分からないまま研究が続けられた。キュリー夫人が白血病で亡くなったことなどから、放射線の人体への影響や取り扱いの難しさなどが、長い歴史の中で次第に分かってきた。
1999年に茨城県東海村の核燃料加工工場で起こった「臨界事故」では、2人の作業員が許容量を大きく超える被曝をした。日本の医学会の威信に掛けて治療したが、放射線が肉や骨を突き抜けて、身体のすべての組織が火傷をした。再生する組織がまったくない最新の医療技術でも手の施しようがなかった。
すべては放射線のエネルギーが生命体の持つそれに比べて桁違いに高いためであり、被曝量がわずかであったとしても、リスクは伴う。

原子力発電所で扱う膨大な放射能

島型原爆2600発分の死の灰を抱えた状況で起きる。広島や長崎の町が一瞬のうちに壊滅し、多くの人々の命を奪った広島型原爆は800gのウラン、長崎型原爆はプルトニウム1100gが燃えた。しかし、今日平均的な100万kWの原子力発電所では、1年間の運転で約1000kgという膨大な量のウランが燃やされている。それは1年間で、広島型原爆1000発分の死の灰を生み出していることになる。

六ヶ所再処理工場の問題点

六ヶ所再処理工場で扱う膨大な放射能

六ヶ所再処理工場では、全国の原子力発電所約30基が1年間に排出する800tの使用済み燃料からのプルトニウムを抽出する。原発で使用済みとなったプルトニウムは他の生成物と一緒に燃料棒に閉じ込められる。再処理工場では、それを細かく砕き、硝酸で溶かし、プルトニウムを分離する。その際、原子力発電所が1年間で放出する放射能を1日で放出すると言われている。現在の原子力発電所が放射性物質を環境に放出する場合は、法律によって規制を受けている。しかし、六ヶ所再処理工場では、あまりにも多量の放射性物質を廃棄することから、国は原子炉等規制法の対



小出 裕章さん



澤井 正子さん

ガラス固化体が製造不能！ 施設直下には活断層！

—六ヶ所再処理工場で今、何が起きているのか—

ガラス固化などの問題

六ヶ所再処理工場では、本格稼働のための最終的な試験運転であるガラス固化体の製造試験が行われている。しかし、その試験自体がうまくいっていない。高レベル廃液は液体のまま大変危険なので、超高温でガラスと混ぜて溶かし、それをステンレスの容器に入れて冷やし固めたものが「ガラス固化体」と呼ばれている。この1年間の実情は、試験の名に値しない惨憺たる状況だ。ガラスを溶かす溶融炉の温度が不安定で、ガラス温度を安定した状態で維持できない。そのため白金族などガラスと混ざらない物質が炉の底部にたまり、溶けたガラスを一定時間内に流下させることができない、などのトラブルが続いている。

六ヶ所再処理工場の高レベル放射性廃液は、死の灰を含んだ高レベル放射性廃液、アルカリ性廃液（薬品などの廃液）、不溶解残渣（硝酸にとけない金属など）の3種類がある。ところがこれまで、不溶解残渣を入れずに試験をしていたことが分かった。これでは試験として無意味だ。

こうしたトラブルが指摘されるたびに、日本原燃は場当たりの対策をたて対応してきた。つまり、ガラス固化体の技術そのものが実験段階のもので完成された技術ではないからだ。さらに問題は原子力安全・保安院の対応である。第4ステップまでの試験に不溶解残渣が入っていないことを知りながら次の試験への許可を出した。ガラス固化体の製造は六ヶ所再処理工場の事業許可の重要な要件だ。原子力安全・保安院は事業認可の取り消しを考慮すべきだ。

活断層の危険

日本の原発の建設時に想定されている耐震性は、不十分な状況。昨年の7月16日に起きた中越沖地震の影響で柏崎・刈羽原発は想定を超える揺れに襲われ、火災や使用済み燃料プールからの水漏れなどの事故が起きている。六ヶ所村再処理工場がある地域には、新たな活断層の指摘があり、予測されている以上の強度の地震が想定される。その対策もされていない。

象から除外してしまった。それは、放出された放射性廃棄物は海や空気中で希釈されるため環境への影響は少ないという理由からだ。
捕捉できる放射能
放出される放射性物質は、クリプトンやトリウム、炭素14などだ。こうした放射性物質を放出しない技術はすでに確立されている。
クリプトンは沸点が零下152度で、その温度に冷やせば液化して捕捉できる。クリプトンの捕捉技術は国費が投じられ完成していることを日本原燃も認めている。仮にクリプトンの年間の放出予定の全量を捕捉しても23kgにしかならない。トリウムも濃縮することが可能だ。炭素14についても水酸化ナトリウムと反応させれば固体化して捕捉できる。にもかかわらず、そうした措置も行わずに海や空気中に放出し、希釈・

拡散させることは広範囲に汚染を広げることではかない。
建設費用は、当初試算されていた7600億円を大きく超え、現在では13兆円にもなっている。そうしたことが、放射性廃棄物を環境中に出さないための経費の検出を阻んでいる原因とも言える。
子どもたちの被曝は断固避けなくては
大きな不安を抱えたまま、六ヶ所再処理工場は、本格稼働をめざしている。六ヶ所再処理工場の稼働を許し、食べものが汚染された場合、細胞分裂が活発な子どもたちは放射能被曝の影響を受けやすい。原子力を選択した世代の責任として子どもたちを守るためにも、放射線の影響が鈍いと言われている50歳を過ぎた世代が、積極的に引き受けて食べていく覚悟が必要だ。

わらかい手を地域に広げる

— グリーンコープの地域福祉の20年 —

「グリーンコープの地域福祉」は、「住んでる街を住みたい街に」、高齢者も障がい者も子どもたちも、誰もが安心して暮らせる街づくりをめざし、取り組んできました。組合員活動やワーカーズを中心に、共助の精神で高齢者福祉や子育て支援がいきいきと地域に広がっています。現在では、生活再生事業やホームレス者の自立支援など幅広い地域運動へと発展しています。グリーンコープの地域福祉の20年を振り返ります。

中期計画基本構想「夢ヲかたちに」の起草

グリーンコープ連合設立から4年、1992年に理事長会が中心になって、これからのグリーンコープに託す組合員の思いをまとめました。それが中期計画基本構想「夢ヲかたちに」です。組合員の思いがグリーンコープの未来構想となることは、組合員主権そのものともいえます。そして、少子高齢化が急速にすすむ社会の中で、緊急な課題である高齢者福祉に早急に取組みました。

画期的な地域福祉政策

グリーンコープが地域福祉に着手するにあたって、当時グリーンコープ連合の担当常務であった石三修さんがヨーロッパの福祉先進地を視察しました。そして、ノーマライゼーションやイタリアの協同組合の福祉の実践など、先駆的な考えが福祉政策に生かされました。1993年9月、全組合員を対象に求められている福祉のあり方を調査するためにアンケートを実施。その結果から、老親の介護への

の手助けなど、高齢者福祉の高い必要性とその担い手となる組合員の存在が明らかになりました。

1994年6月に「地域福祉政策」を策定しました。

基本的観点

①すべての組合員に利益が享受されること②ハンデいの重い人が最も大切にされること③地域に開かれたものになること

財源

①共同仕入れ値引き(グリーンコープ連合の納入業者のみなさんから協力いただき納入高の0.5%の金額を拠出)②福祉活動組合員基金(組合員が一人100円/月拠出する)

中心的機関

「グリーンコープ福祉連帯基金」の設立

グリーンコープ福祉連帯基金の設立と地域福祉の推進

1994年8月にグリーンコープ福祉連帯基金(以下基金)が設立。福祉政策に沿って、グリーンコープの地域福祉を推進していききました。まず、少子高齢化、核家族化などによって老親の介護が困難な状況を背景

社会福祉法人
グリーンコープ

幅広い地域福祉事業を力強くすすめる

2000年、介護保険制度の施行を機に、グリーンコープ生協と家事サービスワーカーズは共同経営という形で、介護保険事業に参入しました。これによって、訪問介護のワーカーズはたくましく成長し社会的にも経営的にも自立することができました。そのことを背景に2003年、福岡県に社会福祉法人焔が誕生し、在宅支援のワーカーズはグリーンコープの各生協と、より対等な関係で事業をすすめていくことができるようになりました。そして、社会福祉法人焔はオールグリーンコープへと徐々に広がりながら、2008年社会福祉法人グリーンコープと改称し、グリーンコープとの不即不離の関係が誰にでも分かりやすくなりました。現在、ふくおか・くまもと・おおいた・かごしま・ひろしま・やまぐち・(長崎)・さかの介護事業が社会福祉法人グリーンコープの事業となっています。

今後は、デイサービス事業を広げ、特別養護老人ホームの建設や子育て応援事業、託児所の開設も予定し、グリーンコープの子育てサポート、食事、店舗、個配、共同購入などのワーカーズも包摂し、グリーンコープの地域福祉運動がより力強く展開できるようにすすめていくことを考えています。また、現在ホームレス者の自立支援運動事業にも取り組んでおり、赤ちゃんからお年寄りまでだれもが安心して暮らしていける社会をめざして、社会福祉法人の機能と役割をフルに生かしながら、新たな事業へと前進しています。

グリーンコープの
福祉ワーカーズ

思いに溢れたあたたかい手を地域に

中期計画基本構想の方針に基づき、まずはじめに取り組まれたのは地域福祉でした。赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが安心して暮らせる街づくりをめざして、公助だけでも、自助だけでもない、互いに助けあう共助を地域に生み出すことを基本的な考え方としました。地域の中には少子高齢化、核家族化の中で暮らしに不自由している高齢者や介護に悩む家族、孤立した子育てに不安を抱える若い母親の姿があり、家事や介護、子育ての援助が必要とされていました。その担い手として、家事サービスに取り組むワーカーズの設立が急がれました。

1995年、グリーンコープで長く活動してきた組合員が中心となり、福岡県に2つの家事サービスワーカーズが誕生しました。以後、各地に家事サービス、デイサービス、食事サービスなどのワーカーズが次々に立ち上がっていきました。2001年には、2,085人のワーカー、ケア時間は36万2676時間と飛躍し、同年、グリーンコープ福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会を設立するまでにしました。連合会の設立後、ホームヘルパーの資格取得講座をはじめ各種の講座が連合会の事業となって実施されています。2007年、62グループ、約2,500人のワーカーが「家事サービス」「食事サービス」「デイサービス」「小規模多機能型居宅介護」などの分野で活動しています。介護保険居宅介護支援事業は、在宅福祉ワーカーズと単協による共同経営と、社会福祉法人グリーンコープの事業として実施され、2007年度、9億227万円という事業高となっています。他にも障がい者(児)訪問介護なども実施し、地域の中になくはない存在として活動しています。また、子育てサポートワーカーズもグリーンコープの集団託児所に取り組み、社会福祉法人グリーンコープと連携しながら託児所の開設などもめざしています。

ワーカーズ・コレクティブとは、メンバーの一人ひとりが共同で出資し、自主運営・自主管理で主体的な新しい働き方をめざす非営利の事業です。福祉ワーカーズは、利用者の立場に立ち、助けあいの精神を大切に事業を行っています

に地域福祉がスタートしました。

の後に着手しました。その後1級ホームヘルパーや介護保険制度の施行に合わせ、ケアマネジャーの受験対策講座を開講。ワーカーズで活動する多くの組合員がグリーンコープで各種資格を取得しています。ワーカーズによる在宅支援は、

体的な取り組みへと踏み込みました。各単協では、生協活動時の託児や子育て家庭への支援、派遣託児・子育てフリースペース、子育てスクール・親子の参加企画・食育の学習会や講演会などに、積極的に取り組みました。

3本の柱を福祉用品事業・情報サービス・家事介護としました。まず、担い手としての家事サービスワーカーズの育成などが急務でした。基金に3つのプロジェクトが設置され精力的に検討されました。1995年

の多岐にわたる活動が展開され、地域での組合員のつどいなどをきめ細かく開催し、ていねいに検討をすすめたことと、100円基金は「参

併せて、2003年には子育て、子育て応援力タロ

の多岐にわたる活動が展開され、地域での組合員のつどいなどをきめ細かく開催し、ていねいに検討をすすめたことと、100円基金は「参



あたたかく、や



グリーンコープ地域福祉のあゆみ

1993年6月	■中期計画基本構想「夢をかたちに」を第一期グリーンコープ通常総会にて採択
9月	■全組合員福祉アンケート実施
1994年6月	■「グリーンコープ福祉政策」を第二期グリーンコープ通常総会にて採択
8月	■グリーンコープ福祉連帯基金設立 ■CO・OP共済の取り扱い開始
1995年	■家事サービスワーカーズ（「あじさいの会」・「ひだまり」）が福岡県に誕生 ■ふくし情報でんわ開設 ■福祉生活用品カタログ「しあわせ生活自由自在」発行
1996年	■福祉活動組合員基金の検討が会員生協にて開始
1997年	■2級ホームヘルパー養成講座（厚生省の指定）
1998年	■介護保険に向けて学習会や行政との協議開始
1999年	■福祉集会 ■福祉ワーカーズ研究会 ■2級ホームヘルパー養成講座の開始 ■続いて1級ホームヘルパー養成講座の開講
2000年	■ケアマネジャー受験対策講座開始 □介護保険制度がはじまる ■介護保険事業への参入（スタート時は一部のワーカーズのみ、徐々に参入するワーカーズが増えていく）
2001年	■訪問介護員講師養成講座 ■福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会設立
2002年	■社会福祉法人設立 ■グリーンコープ子育て応援プロジェクト答申確認 ■子育て応援33万人組合員アンケート
2003年	■子育て応援の取り組み開始 ・ライフプラン講座 ・グリーンコープの託児の考え方 ■子育て応援総合情報誌「グープ」発行 ■子育て・子育て応援カタログ「キッズGREEN」発行 ■訪問介護員実技講師養成講座 ■ベビーシッター養成講座 ■ガイドヘルパー養成講座
2004年	■グリーンコープ福祉連帯基金解散 ■介護福祉士受験対策講座
2005年	■グリーンコープ地域福祉交流会 ■精神障がい者ホームヘルパー養成特別研修
2006年	■グリーンコープ地域（福祉）運動交流集会
2007年	■グリーンコープ地域運動交流集会
2008年	■社会福祉法人の名称を社会福祉法人グリーンコープと改称する ■グリーンコープ地域運動交流集会

1997年、福祉連帯基金は厚生省の指定を受け、2級ホームヘルパーの資格取得講座を開講。各単協で

在宅支援の充実

家事サービスワーカーズは経験を重ねながら、訪問介護・通所介護・福祉複合施設などをグリーンコープと共に開設し、活発な事業を展開するようになりました。2001年には福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会が設立されました。

高く評価されている福祉活動組合員基金

1996年から、福祉活動組合員基金（以下100円基金）の検討が、グリーン

コープの理念に基づき、すべての組合員によって広く薄く支えよう」という理解を得ていきました。「100円基金」は、ワーカーズの事業や地域福祉を担う団体の助成などに活用され、グリーンコープの福祉に大きな役割を果たしています。

子育て応援の展開

子育て応援の取り組みが2002年、「グリーンコープ子育て応援プロジェクト答申」を確認し、スタートしました。同年全組合員を対象とした「子育て応援33万人アンケート」は、82.1%という高い回収率でした。アンケート結果では「育児に自信がなくなる」とある。「母親がイライラする」「自分のしたいことができない」など、子育ての状況が浮き彫りになりました。

アンケートをもとに、グリーンコープの子育て応援に関する指針をまとめ、具

グリーンコープ福祉連帯基金の発展的解散

社会的な信頼を得たグリーンコープの福祉事業を、さらに広げるために、社会福祉法人による事業展開を模索しました。2002年、福岡県に「社会福祉法人」が誕生。オールグリーンコープへと発展させながら、2008年には「社会福祉法人グリーンコープ」と改称しました。

地域福祉の遂行の中心的な役割を担ってきた「グリーンコープ福祉連帯基金」は、地域福祉の大きな進展を成し遂げ、2004年に発展的に解散しました。以降、地域福祉の取り組みは各グリーンコープ生協・社会福祉法人・福祉ワーカーズ連合会・グリーンコープ共同体が連携しながらすす



ジュース用(加工用)
トマトキャラクター

国産原料を守るために… ジュース用(加工用) トマトの生産を応援しよう

グリーンコープは国産のジュース用(加工用)トマトの生産を応援する取り組みをしています。

その一環として、2005年から商品価格に付加している「生産奨励金」と「援農支援費」を生産者に直接届けています。

ジュース用(加工用)トマトの生産は天候などによる影響が大きいため、原料を確保するために産地を拡げています。2008年度は、北海道JAふらのが生産奨励金の対象産地として増えました。

12月4～5日、組合員の代表が生産地の長野と北海道を訪れ、今年度分の生産奨励金と援農支援費を贈呈し、組合員の気持ちと応援のメッセージを伝えました。

産地ごとの生産者数・栽培面積と生産奨励金

J A 名	08年生産者数(名)	08年面積(a)	07年面積(a)	面積の前年比(%)	生産奨励金
J A ながの	112	1631.3	1928.6	84.6	3,628,200
J A グリーン長野	43	328.5	367.1	89.5	657,000
J A あづみ	80	1527.0	1534.0	99.5	3,466,850
J A 信州うへだ	0	0.0	74.8	—	0
J A 志賀高原	2	37.3	89.9	41.5	74,600
J A 中野市	9	58.1	71.2	81.6	116,200
J A 北信州みゆき	0	0.0	73.9	—	0
計	246	3582.2	4139.5	86.5	7,942,850
J A ふらの	22	386.5	321.0	120.4	966,250

※JAふらのの原料は2006年からケチャップ原料として使ってきました。2008年から生産奨励金の対象となっています。

加工用トマトは、支柱を立てずに地を這うように育つ。すべて露地栽培なので収穫は8月に集中する。夏の炎天下、腰をかかめての収穫作業は、高齢の生産者にとって非常に過酷なもので、それも栽培の継続を困難にさせる要因の一つになっている。

加工用トマト生産者を 取り巻く厳しい現状

トマトケチャップやトマトジュースの原料である加工用トマトは、1989年のトマト製品の輸入自由化を機に、そのほとんどが輸入物に取って替わり、国産トマトの生産は激減。かつて40万トンも生産されていた国産トマトは、減少の一途を辿っている。国内の生産者は農業で生活できなくなるほど厳しい現実の中にあり、生産者の減少に歯止めがかからない状況が続いている。高齢化、後継者が育たないという日本の農業がかかえる問題がここにもある。

国産の加工用トマトを 守っていききたい

これまでグリーンコープと生産者が共に築いてきた産直の関係によって、グリーンコープの農作物生産者の多くは後継者が育ってきており、安定して農業を継続できている。加工用トマトについても、市場が輸入原料になっても、グリーンコープは国産にこだわりの生産者との関係を深めながら生産量を確保してきた。しかし、生産者の高齢化などで、いよいよ加工用トマトの確保が困難になる中、グリーンコープが取り組んだのが「生産奨励金」と「援農支援費」だ。組合員に産地の現状をきちんと



生産奨励金の対象トマト加工製品



生産者・掛田喜代光さん(左) 鈴木雅幸さん(右)
さが 田中理事長(左) くらもと 山本副理事長(右)

北海道 JAふらの

長野県 JAながの JAグリーン長野 JAあづみ JA志賀高原 JA中野市



JAながの 吉村太美男さん(右) 本河産直・交流委員長(左)
杉山昭昭さん(中央) (島根) 角理事長(右)
北村敦博さん(左)

長野県へは、特に収量の多い3農協(JAながの、JAあづみ、JAグリーン長野)を、グリーンコープ生協(島根)理事長・角幸恵さんと、グリーンコープ共同生産直・交流委員長・本河しのぶさんが訪れ、生産奨励金と援農支援費を届けました。

この3農協には、加工用トマトを生食用に企画した時に価格に計算される「援農支援費」を届け、収穫時の人手の確保に活用してもらっています。

他の2農協にも、生産奨励金を届けました。

角さんは、「40万人の組合員がおいしいジュースやケチャップを待ち望んでいるので、できる限りこの関係が続いていくことを願っています」と挨拶。その後、目録とグリーンコープ生協(島根)の食べもの委員会からの応援の寄せ書きを届けていきました。

2008年度の作付面積や生産量は、全体的には縮小傾向が続いています。これを少しでも食い止めるため、国産の加工用トマトを守っていくため、今後も交流を続けていくことを確認しました。

手渡しました。本河さんは、「生産者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいなんです。みなさんのおかげで国産のトマトで作った商品を安心して利用できます。健康に留意し、これからも頑張ってください」と激励の言葉を届けました。

生産者からは、「毎年大変感謝していますが、厳しい状況が続いていますが、組合員のみなさんの期待に応えるべく、頑張っています」「お互いの顔が見える関係を誇りに思い、それを励みに頑張りたい」「女性生産者も徐々に増えてきました」など、意欲的な声がかげられました。

2008年から、加工用トマトの生産奨励金の対象になった北海道JAふらのに生産奨励金を贈呈しました。目録を手渡したのは、グリーンコープ生協が理事長・田中裕子さんとグリーンコープ生協くらもと副理事長・山本睦子さん。JAふらのからは、生産者2人と井山常務をはじめ職員3人が対応しました。

初めに、加工用トマトの生産奨励金の贈呈にあたり、田中理事長が「グリーンコープは国産原料にこだわり、ケチャップなどのトマト製品の原料も国産の加工用トマトを使っています。しかし、国産のトマトの生産量は減少するばかりです。そのような中で、私たちのために加工用トマトの栽培を引き受けてくださり感謝します。北海道の生産者の方と出会えてとてもうれしです」と挨拶しました。加えて、事務局からグリーンコープの生産奨励金の仕組みについて説明をしました。

生産者を代表して、鈴木さんから「加工用トマトは収穫の時から一番大変。家族はもちろんアルバイトを雇って行きます。是非収穫作業を見てほしい。これまでは自分が作ったものを誰か食べているのか、など考えたことはありませんでした。顔の見える関係というのがいいですね」と、初めての出会いに感動したようすの挨拶がありました。

歓談の中で、井山常務から「いろんな生協とのつきあいは長いのですが、このような形で応援していただくのは初めてです。生産者も大変励みになると思います。ありがたいことです」というお礼が述べられました。事前に送っていた加工用トマト製品を紹介しながら今後さらなる交流を深めていくという話で盛り上がりしました。

すばらしいびん牛乳を これからも

2008年度 第2回酪農生産者交流会 12月1日 熊本県菊池市



贈呈式。組合員の思いと共に生産奨励金などが手渡された

グリーンコープは2008年5月から、産直びん牛乳の価格に「生産奨励金」を加算しています。2008年度の生産奨励金は4回に分けて贈呈されることになっており、9月12日に第1回目、今回、第2回目の「生産奨励金」が交流会で酪農生産者に手渡されました。グリーンコープ共同生産直・交流委員ら組合員22人、酪農生産者35人をはじめ、メーカーなど総勢66人が参加しました。



女性生産者の思いを語る
中村つる子さん

交流会は、前半がグリーンコープ各単協のびん牛乳の取り組み報告や生産奨励金贈呈式など、後半はnon-GMO牛乳生産者女性部主催の懇親会でした。「他にはないすばらしいびん牛乳を子どもたちの代もずっと飲み続けていけるように、そして酪農生産者のみなさんへの応援の気持ちを込めて2回目の生産奨励金をお持ちしました」と産直・交流委員長本河しのぶさんの挨拶がありました。生乳生産者を代表して矢野桂吾さんが「この厳しい状況下で生産奨励金は大変助かります。これからも組合員のみなさんに安心してたくさんびん牛乳を飲んでもらえるよう努力していきます」と挨拶しました。JA菊池酪農課係長川口浩一さんからは「昨年からは今年にかけて菊池地域で34戸の酪農家が廃業しました。多くの方に牛乳を飲んでもらうことで酪農家は元気になると思います」と、最近の厳しい状況を訴えました。

その後、各単協がびん牛乳利用普及と予約拡大の取り組みを紹介。手作りチラシでびん牛乳のよさを伝えたりとところ予約が増えたなど元気の発表がありました。また、産直・交流委員を代表して多伊良理津子さんから「産直・交流委員会ではびん牛乳を組合員にもっと理解してもらうために、びん牛乳の形をしたリーフレットを作成中です」とうれい報告がありました。女性生産者中村つるさんは「グリーンコープの生乳生産者になったきっかけは息子が「酪農を継ぎたい」と言ってくれたことでした。酪農家として誇りを持って続けてほしいと思い、non-GMO(遺伝子組み換えでない)飼料で飼育する生乳生産者になりました」と酪農家として母親としての思いを語りました。贈呈式では「酪農生産者奨励金2484万円(7月〜9月分)」が矢野さんへ手渡されました。他に各単協の組合員から酪農生産者へのメッセージや組合員から寄せられた牛の乳房を拭くタオル、タオルを洗うための粉せっけんがそれぞれ生産者に手渡されました。

今回の交流会は生産奨励金の贈呈により、酪農生産者は生乳を作り続けること、組合員はびん牛乳の利便性を確保することを確認し、連帯の気持ちを強くした有意義な会になりました。

グリーンコープがめざす 生活協同組合

グリーンコープのあゆみ (食べもの運動)

グリーンコープ運動の原点は、「食べもの運動」です。環境汚染による健康被害やカネミ油症などの食品公害、経済性や便利さを優先するための添加物や加工食品の氾濫。生命を育むはずの食べものが、子どもたちや家族の生命を脅かすことから、「安全な食べもの」を手に入れた。1988年、それまでの地域で生協運動を展開していた15万人の母親たちが、「思い」を一つにし、「いのち・自然・くらし」を守るグリーンコープ運動へと歩をすすめたのです。「生命を育む食べもの運動」は、「農業」や「環境」を守る運動でもありません。安心で安全な食べもの作りのために、互いに顔が見え、信頼が築かれ、持続可能な生産ができるグリーンコープ独自の「産直」、アジアの国々との民衆交易による「南と北」の連帯の取り組み、国産へのこだわりなど。しかし、そうした考えに逆行するかのよう「環境ホルモン」や「遺伝子組み換え」、「BSE」などの問題、その上食品偽装事件が頻発するなど、「食」をめぐる大変な状況が続いてきました。

グリーンコープはそのような問題に対し、迅速な情報公開など徹底した対応をしてきました。それによって、グリーンコープに対する社会的評価と組合員の信頼を築いてきました。現在、日本の酪農や農業、漁業を守るために、生産者を応援する取り組みに力を入れています。さらに、畜産飼料の国産化や食べものを無駄なく利用するための循環システムの構築を模索しています。次の時代を担う子どもたちの生命と暮らしを守るために、もう一段の力の結集が必要とす。

言いたい

私の好きなグリーンコープ商品

なめらか豆腐は懐かしの味

小さい頃、数軒先の豆腐屋さんまでよくおつかいに行っていた。右手にボウル、左手に小銭をにぎりしめ、豆腐屋さんに着くとおじさんが、深い水槽にたくさん沈んだ豆腐の中から一丁すくってくれた。水を張ったボウルを抱えて帰る道、緊張したことを覚えている。グリーンコープに加入して嬉しかったことは、豆腐がおいしくて安心して食べられること。特になめらか豆腐は食感がよく使いやすいのでよく利用している。スライスしたトマトと交互に重ねてカプレーゼ風とか白玉粉とこねる豆腐

白玉などいろいろやってみるが、やはりおみそ汁に入れるのが一番。お豆腐屋さんから帰ると作ってもらった懐かしいおみそ汁の味がよみがえる。ラッパを吹きながらおじさんが自転車で豆腐を売っていた時代に帰るのは無理だけれど、豆腐のおいしさと安心・安全はいつの時代も変わらずにあつてほしいと思う。

二男の離乳食がもうすぐはじまる。グリーンコープの豆腐がこれからはますますわが家に登場することだろう。

中野 郁子

投稿募集

●400字程度 ●A4切 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報は、本紙に掲載の場合のみ使用します。

T812-8561
福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ連(REN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

2008年12月の組合員数 405809人 (12/23現在)

放射能汚染測定結果報告

放射能汚染食品測定室検査。
NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

リユース リサイクル データ 2008年10月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドバック
回収本数1,166,697本 回収率 97.5% (9月14日~10月18日回収分)	今月のデータ掲載はありません	回収重量 13,494kg 回収率 57.1%	回収重量 40,780kg 回収率 118.3%

2008年11月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドバック
回収本数 929,043本 回収率 98.3% (10月19日~11月15日回収分)	回収本数 202,553本 回収率 55.8%	回収重量 15,238kg 回収率 60.0%	回収重量 35,240kg 回収率 81.6%

(182) 2008年10月

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ スライスチーズ	ニュージーランド	ND	ND	ND	豚飼料 肉豚用		ND	ND	ND
※ ビール	国内産	ND	ND	ND	豚飼料 仔豚用		ND	ND	ND
※ 豚肉	宮崎県	ND	ND	ND	豚飼料 人工乳		ND	ND	ND

(183) 2008年11月

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ ホワイトペパー	インドネシア・マレーシア	ND	ND	ND	※ みかん	福岡県	ND	ND	ND
※ パレイソ(県産)	北海道	ND	ND	ND	※ れんこん	熊本県	ND	ND	ND

グリーンコープ

未来へつなぐ20年 私の思い



グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つひとつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープの成熟へとつながってきています。この一年間、さまざまな人とおしてグリーンコープの歴史をひもといていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワーカーズ・職員からのリレーメッセージを掲載します。



グリーンコープ生協(鳥根)元理事長 岩谷 美恵子

私が生協活動に傾注していったのは、クモ膜下出血という病で生死をさまよう経験をした1993年からのことです。まいにち生協(現グリーンコープ生協(鳥根))で初の組合員事務局員として、活動していく中、自分に向かって誠実でありたいと願う多くの人々(生産者、加業者、活動者など)の生協に寄せる熱い思いに出会ったのです。経済効率優先ではなく、自然の中で共生して暮らすことの大切さ、そうすることで、人間に与えられている自然治癒力・免疫の力が最大限に働く。今まで病気をすれば病院に委ねるだけで何の疑問も持たなかった私は、目からウロコ状態、同じ考えの仲間と一緒に「食・環境」などについて学ばせていただいたのでした。

生協活動から学んだことが 今の社会活動の基盤に!

えていました。そこで、理事会で協議を重ねた結果、創立50周年を目前に、理念を共にするグリーンコープ連合への加入を1993年に決定し、仲間に入れていただくことになったのです。

新しいスタートははじまったのですが、私たちの力不足のため、支えていただいた地元生産者の方との別れもたくさんありました。新しい出発にはなんとたくさんさんの痛みが伴ったことでしょうか!

不安な中、初めての博多での連合理事会出席! やさしく大きく包み込むように受け入れてくださった理事会メンバーのみならず、協石連の全国大会で利用率アップの連続全国表彰の栄誉、遺伝子組み換え反対の全国活動など、「大きく連帯して小さく動く」を肌で実感した瞬間瞬間が昨日のように思い出されます。

生協活動の中でたくさんさんの学びをいただき、それらの理念が今の私の地域社会での活動基盤になっています。経済効率優先のこの現代社会だからこそ、生協活動の役割は大きいと思います。先人のみなさまのご尽力あってのこの20周年! ますますの躍進を期待して止みません。

※協同組合石けん運動連絡会

1993年7月号の「共生の時代」に、第一期通常総会の記事があり、その中に「ライフベル」とくまもと共生社が合流の見出しがあった。となりには「夢ヲかたちに」が採択された報告も。この記事を胸膨らませながらも複雑な思いで読んだことを覚えている。命の尊さ、それを守ることの大切さからこそ、ずつと暮らしの中に命の警鐘を鳴らし続けようとの思いを込め、共同購入会「ライフベル」を設立して5年が経っていた。大きなグリーンコープと合流することについて、何回も何回も検討した。脱退していく会員もいた。そんな中、遠い都会の福岡から小さい町水俣の「ライフベル」の事務所にきて、「水俣に

「グリーンコープさん」と呼ばれながら 地域の中で生きる

小規模多機能型居宅介護 ほのぼの・水俣 管理者 林 里美



グリーンコープの組合員が100人越えた時、水俣は変わるよ。そして、グリーンコープも変わり社会も変わる」と、天井に届きそうな大きな人が大きな目をきらきら輝かせて熱く語った。故兼重専務であった。

尊い命を守り続けるためにはより安心な食べものを、人と人との顔の見える関係での流通を、そして、環境を危うくしている暮らし方があれば一つひとつ改めていこうと掲げていた「ライフベル」は、そのまま、グリーンコープの中にもあった。

そこにはより多くの人の思いが結集されていた。「四つの共生」の理念の下、食べもの運動から派生した、「せつけん」「リサイクル」「平和」「ネグロス」「脱原発」などの運動をおし

て、共生の地域、共生の社会を実現していくこととしているグリーンコープのすべてが刺激的で、心地よさを感じた。

私は、地域活動委員・福祉活動委員・理事会室員などを経験した。地域活動委員会の中で、グリーンコープから出発し、グリーンコープを貫き、グリーンコープを越え、地域化するということを学んだ。不思議なくらい自然に胸に落ちた。あれから16年、まだグリーンコープを越えることはできないが、私は、あの時の「夢ヲかたちに」のひとつ、地域福祉の活動・事業をおして「地域」にいる。「グリーンコープさん」と呼ばれながら...

現在、水俣の組合員は1200人である。

1990年2月末日で当時加入していた西部生協(鳥取県西部地区をエリア)が事業停止しました。これを機会に組合員が主役で国産にこだわり、せつけんのみを扱う生協(「くらし・健康・環境」をテーマ)を作ろうと組合員と当時の生協の職員で立ち上げたのがグリーンコープ生協とつとり(設立時は県民生協クローヴァ)のスタートでした。生協立ち上げのために、鳥根県中部生協(現グリーンコープ生協(鳥根))さんに相談に伺った時にグリーンコープのカタログを見て「エー!世の中に私たちが作りたい生協が存在しているんだ」。そして帰りの車中ではすぐにでもグリーンコープの商品が供給できると思ったことを思い出しま



グリーンコープ生協とつとり 専務理事 新田 ひとみ

螺旋階段を登るように 歩んできた

第1回発起人会を開催してから僅か5カ月で生協の認可がおりました。産む苦しみは知らなかったものの、生協を創る想いは誰にも負けませんでした。事業運営(経営)という意味では未熟なままのスタートでした。

着任しました。グリーンコープの「連帯は無条件である」を実感しました。組合員活動は優しくなやかに、専従事務局は叱咤激励を受けながら、ご支援を連合・会員生協から頂き、螺旋階段を登るように現在まで歩んでくることができました。

1990年の生協設立を望んだ多くの組合員の想いが、グリーンコープ生協になって実現しました。

グリーンコープ 共同体の一員として、地域の中で存在できるグリーンコープ生協をめざし、とつとりの「夢ヲかたちに」を創っていきます。

そして、100円基金、地域福祉の実現に向かって、先輩生協の背中を見失わないようにしっかりと歩んでいきます。